

【学部・学科紹介】

◇総合人間学部

(1) 学部設立の基本理念

本学部は、平成4年10月1日に法令上設置され平成5年4月に第一期生を迎えた、京都大学で最も新しい学部です。

新学部を「総合人間学部」と名づけた理由は、本学部の研究・教育が、自然と調和した人間の全体的形成を目標とするものだからです。「総合人間学」とは、心理や思想といった内面、あるいは身体面だけでなく、政治・経済・文化・歴史といった社会環境、さらには物質や生物などの自然環境との関係を含めて、人間存在のあらゆる面に光を当てようとする学問です。すなわち、人間と人間をとりまく世界を総体的に捉える新たな学問の確立が、総合人間学部に与えられた課題なのです。

現代社会の危機を克服するためには、人間自身を最大のテーマとして取り上げなければなりません。そうしてこそ初めて人類生存の可能性や文明の可能性が求められるからです。このような根本的な問題の追究は、従来のような高度に専門化された研究だけでは不可能です。京都大学の自由な学風と伝統のもとに、既存の個別科学の枠を越えた、より多様で総合的な学問の場を提供することを、本学部はめざしています。

総合人間学部は、大学院人間・環境学研究科に直結する学部として構成されています。専攻分野の細分化を避けて、時代の要請に適應できる1学部1学科制をとり、総合人間学科の下に、人間科学系、認知情報学系、国際文明学系、文化環境学系、自然科学系の5学系を設けています。

5学系全体で120名の入学生は、最初の1年間はどの学系にも属しません。そして、自由に広い学問分野に触れた上で、2年進級時に自らの学系・主専攻を選択します。その際、「文系」または「理系」のいずれの入学試験を経たかは問われません。また広い視野を持つ創造性豊かな人間を育成する目的で、本学部は副専攻の制度を設けています。これは各自の主専攻の他に、異なる学問分野を系統的に履修することによって、幅広い専門知識を身につける制度です。卒業の際には、学士の学位記とは別に、主専攻・副専攻を明記した専攻認定書が発行されます。

(2) 総合人間学部が望む学生像

本学部の基本理念に共鳴し、積極的に総合人間学の開拓を志す学生、また文系・理系の既成の枠に縛られることなく、多様化する21世紀国際社会のリーダーたらしめる学生、未知の分野・未踏の地を恐れず、限りない好奇心をもつことのできる学生、学を究めるためにはいかなる労苦をもちとわず、その先に見えてくる新たな光に無上の喜びを感じることをのける学生、本学部はそういう学生が門をたたくことを望んでいます。

(3) 各学系の概要と教育内容

人間科学系

科学技術の加速度的進展や情報化の高度な発展に伴って、人間をめぐる社会的・物質的環境は過去数十年の間に著しく変化しました。その変化に対応するかのよう、既存の人間に対する知では十分説明しきれないような、さまざまな人間行動や社会現象が生起するに至っています。本学系は、人間をめぐるこうした現代的状況を背景にし、また諸科学が蓄積してきた人間に関する知を前提にしながら、人間についての全体的で根底的な理解の獲得をめざしています。この目的を実現していくための道筋としては、三つのものが考えられます。第一は、人間の諸活動の成果をもとに人間そのものについての思索を深化させていくという方向であり、第二は、人間を徹底して社会的文脈の中に置き、その中で人間についての知見を貯えていくという方向、そして第三は、文学を含む文化現象全般から人間についての理解に迫るという方向です。第一の方向は「思想」研究の方向と名づけるべきものであり、そこからは哲学や倫理学の伝統を前提にした人間存在についての思想的解明、あるいは造形芸術や演劇などの人間の創造行為全般についての思想的・歴史的研究がなされます。また第二の「社会」研究の方向からは、人間形成の諸過程・諸問題に関する実証的・理論的解明、あるいは人間の社会行動についての実証的・理論的研究が行われます。そして第三の「文化」研究の方向からは、文学作品を中心とした表現文化についての研究、さらには歴史学と社会学を踏まえた文化・文学・映画研究が行われます。「思想」「社会」「文化」の三つの方向は相互に有機的に連関し合って、「人間についての全体的で根底的な理解」という本学系の目的の実現をめざします。

抽象度の高い思考（「思想」）と社会的現実についての冷静な分析（「社会」）、それに文学を含む諸文

化現象への幅広い教養（「文化」）という三極構成の問題空間を系統的に学ぶことによって、人間についての深い洞察と理解をもった、これまでにないタイプの人材が輩出することが期待されます。こうした人材は、大学院、各種シンクタンク、教育界、公務員、家庭裁判所調査官、マスコミ関係、流通・広告業界など広い範囲で求められ、活躍することになるでしょう。

認知情報学系

脳・身体・言語・数理情報などに関する研究を通じて、人間および計算機の多様な創造世界に関する理解を深めることを目標とします。また、運動医科学や代謝栄養学の立場から、身体運動が肥満や生活習慣病の予防・治療に果たす役割やその生理学的機序に関する基礎研究をもとに、適切な食生活や運動習慣からの逸脱と遺伝的要因により発症する生活習慣病のメカニズムを探求します。人間同士あるいは人間と環境との関わりは、脳、身体、言語等をインターフェースとして行われます。環境の認識と環境への働きかけは、脳内の認知機構と運動制御機構の発現によって実現されるのです。人間相互のコミュニケーションは、脳が構築した言語システムを媒体としており、それを媒介する計算機の情報処理には、情報処理の複雑な数理機構が関与しています。また脳の知的作業の最も昇華された世界が、数学的認識であるということが出来ます。

本学系は、（1）ハードウェアおよびソフトウェアとしての脳の機能を、行動学的・認知科学的・神経科学的手法を用いて解明し、人間の知性と創造性の基本原理を理解すること、（2）運動不足やエネルギー摂取・消費のアンバランス、偏った食生活や遺伝的素因等により発症する生活習慣病の、生理学的・病理学的・運動科学的メカニズムを探求し、予防医学の発展に寄与すること、（3）計算機における情報の伝送・蓄積、制御や処理の過程を解析し、情報処理の理論と機能を考究すること、（4）種々の現象の数学的モデルを構築し、それを数理科学的手法を用いて解析し、われわれをとりまく世界の認識を深めること、（5）我々の認識を反映している自然言語・人工言語の構造と機能、生成と理解のプロセスを明らかにし、自然言語や形式言語のメカニズムとその背後の認知のメカニズムを解明すること、（6）外国語教育のための理論的研究を行い、効果的で効率的な外国語教育のための教材や学習支援システムを開発することをめざしています。

人間の健康や脳の機能から、人間の認知、行動発現、言語機能の探究、そして、その基礎となる運動・代謝栄養医科学、情報科学や数理科学にいたるまで、総合的に学ぶことを目標とします。従来の理系・文系という枠を越えた幅広い探究能力と、人間の認識行動の総合的理解に基づく科学的で柔軟な思考能力を身につけることにより、どのような職種に就いても、的確なリーダーシップを発揮することができるでしょう。

国際文明学系

西欧において発展した近代主義は、政治参加の大幅な拡大、経済的な繁栄、情報の利便化、世界の一体化などをもたらしました。その反面、例えば市場競争の文化・生活構造および人間の感性や価値観に対する影響、グローバル化と地方文化・生活文化との矛盾、深刻な環境問題など、複数の領域に及ぶ諸問題を生み出しています。

本学系では、近代主義について多面的な検討を加えることを念頭に、その現状に対して、政治論・経済論・法律論・社会論・科学論・メディア論・環境論などを領域横断的に相関させた分析を加えます。そして西洋史を通して、その歴史的背景を追求し、欧米文化の研究によって、近代主義の文化的表現の解明をめざします。また日本史を通して、近代主義受容以前の独自の歴史・文化を分析するとともに、いち早く近代化した日本のあり方を検討します。さらに、東アジア文化との対照を行うことで、近代主義の相対化をめざします。これらを通して、近代主義が生み出した諸問題を解決するにふさわしい、国際的で新たな文明の理念を構築することが、本学系の目的です。

学生は、現代社会に関する社会科学系諸分野と、日本・東洋・西洋の歴史・文化に関する諸分野の知識・方法論を総合的に修得することによって、既存の文系諸学部とは異なる学際的な教養と柔軟な思考の獲得をめざします。総合的な社会科学的思考方法を身につけた人材は、新しい学際的な研究分野を開拓しようとする大学院への進学や、民間企業をはじめ官庁・自治体、出版界、中・高教員、学芸員など、多彩な方面で求められるでしょう。

文化環境学系

世界の各地では長い歴史の過程の中で、地域特有の自然環境の影響を受けるとともに、特定の言語・宗教や社会・経済などの諸条件のもとに、固有の民族性や地域性が育まれてきました。これに加えて、とくに16世紀以降、非西欧世界の諸文明は、世界化しようとする西欧文明との衝突と受容を通して、みずからの地域

文明の特性を維持しながらも、伝統文化の苦悩に満ちた消長を経験してきました。

本学系は、近代文明のグローバル化が進展する現代にあって、各文明の地域的特性を多角的に比較しつつ、文明相互の交流とその文化的所産、さらには文明の自己相対化の諸相を、多様な視点から解明することをめざします。

学生は、世界の諸文明の特質を比較対照しつつ、それらを相対化して捉える習慣を身につけます。同時に、文明社会の基層単位をなす世界各地固有の民族性や地域性、人間社会にとって基本的な居住の諸相の実態と将来的な意義についても理解を深めます。人間社会に対する基本的な理解とグローバルな視点を持ち、諸文明の交流を通時的かつ共時的に把握して、その交流現場に係りうる包摂的能力を備えた学生は、ジャーナリズム・メディア関連、地域計画関連、国際機関、図書館、博物館、官公庁、商社などの社会における主導的職種、あるいは複数の専門領域に通ずる学際性豊かな教育研究職にふさわしい人材となるでしょう。

自然科学系

階層構造をなす自然を理解し、自然と人間との共生関係を探究するためには、一見多様で複雑に見える地球環境や物質の構造・性質、そしてヒトを含めた生物・生命現象を物理学、物質科学、生物科学、地球科学的手法を用いて調べ、それらの成り立ちや物性・機能、そして変遷を明らかにすることが必要となります。さらに、その中に潜みそれらを支配している要因・基本原理を見いだし、お互いの相関関係を論理的、統合的に把握することが重要です。

本学系では、(1) 物質の持つ基本的性質を原子、分子、電子およびその集合体のレベルから理解し、それらの織りなす多様な物性現象やエネルギー形態を解明するとともに、それらの知識が今日の科学技術の発展の基礎となってきたことを理解し、物理学の新しい展開の方向を探究すること、(2) 様々な無機および有機物質と生体との相関を解明し、それらの機能と微視的構造を明らかにするとともに、化学反応の仕組みや制御法を研究して、優れた機能を持つ材料や目的物質を環境負荷なく創製するための基礎を養うこと、

(3) DNAレベルから生態系レベルまで、各階層の生命現象と生物の機能をさぐり、また生物の多様性と進化並びに様々な種間関係とそれらが織りなす生態系の仕組みを探究すること、(4) 自然界の種々の元素や化合物の分布と循環・動態を解明するとともに、宇宙の誕生から地球46億年の歴史を振り返り、地球環境の変遷とその仕組みを解明すること、さらに学系全体として、自然界の森羅万象を対象として、それらを統合的に理解することを目指します。

学生は、自然科学の諸分野の基礎を系統的に学修するとともに、他の学系と連携して人間と自然との共生関係を探究するための総合的な自然観と物質観を養うことをめざします。これらの学修を通して、環境問題などの総合科学に携わることのできる研究者や、科学行政官、博物館学芸員、科学ジャーナリスト、理科教育者等に要請される素養を身につけることができます。また、いずれかの専門を修める場合にも、既成の個別分野にとらわれない非境界的・流動的な新しい領域を開拓できる能力を培うことが期待されます。

◇文 学 部

(1) 文学部が望む学生像

文学部における教育は、人文学の名のもとに、思想、言語、文学、歴史、行動、さらに現代文化に関わって展開されてきた諸学の成果を学生に教授し、共に学び考えながら、新たな知的価値を創出することをめざしてなされるものです。そこでの活動には、単に文系の範疇に含まれるものだけではなく、高度な数学的方法や実験的手法、また情報処理の技術を必要とするものもあります。文学部は、人文学の諸学問に関して、こうした幅広い能力を具え、かつ深い教養と倫理性にも優れた人材を育成することをめざしています。そのために求められる学生は、過去から、現在に至り、さらに未来にまでのびる人類の営みについて、様々な角度から関心を寄せ、柔軟な思考力によって問題を発見し、その解決のために、論理的に、また歴史的に、創造性豊かな考察を展開することのできる能力をもつ者であることが望まれます。

文学部では、以上の理由から、センター試験によっては、総合的な基礎学力を学生が有することを求め、さらに個別学力試験では、国語、外国語、地理・歴史とならんで数学を課すことによって、思考力の柔軟性と論理性を問うことにしています。

(2) 文学部の教育内容

本学部は、明治39年（1906）9月、文科大学として創設、大正8年（1919）2月文学部と称されることになりました。文科大学開設の年、哲学科が、翌40年（1907）9月史学科、さらにその翌41年（1908）9月に文学科が設置され、45年（1912）5月までに当初の教育研究体制がほぼ整備されました。それ以後、時代の要求に応じて講座の拡充が行われてきましたが、平成4年（1992）4月より新たに文化行動学科が設置され、4学科、44講座、30専攻となりました。平成7年（1995）4月から4学科を廃止し、新たに人文学科1学科が設置されました。

人文学科設置にあたっては近年の人文科学のめざましい発展に即応するとともに、現在人類が共通にもつ様々な特性や、共通に抱える思想的、倫理的、文化的、科学的課題を基礎においた新しい人文学の構築を目指しました。この目的に沿って、より広い学問的視野に対応した哲学基礎文化学系、東洋文化学系、西洋文化学系、歴史基礎文化学系、行動・環境文化学系、基礎現代文化学系の6系と、その中に従来の専攻に相当する32の専修学問分野が設置されています。

志願者が入学前に専修の志望を決定することは難しいと思われるので、2回生でそれぞれの系に、次いで3回生からは各専修に分属します。各専修とも人間社会についての深い知識と理解を必要とすることから、語学はもちろん、諸学を広く勉強することが望まれます。3・4回生時は、本格的専門教育を行います。少人数の専門教育が原典に即して行われる場合が多くなります。また、各専修における高度の専門教育と並んで、人文学全体に対するより広い視野を養うため、それぞれの系を単位とした共通の講義も開講されます。卒業に際しては、演習指導をもとにして卒業論文を作成することが必要です。

卒業後の進路は、大学院へ進学する者のほか、教育関係、新聞社、放送局、出版社、官公庁、図書館、博物館、情報関係等、多方面にわたっています。

◇教育学部

(1) 教育学部が望む学生像

20世紀は教育が学校中心に機能した学校教育社会でした。しかし、21世紀は学校だけでなく、社会のさまざまな場所と一人ひとりの人生のさまざまな局面とにおいて、人間形成の営みがゆるやかにネットワーク化される「人間形成社会」が出現すると予想されます。これからの教育学は、この「人間形成社会」の展開過程で必要になる、新しい種類の〈教育〉を創造するという課題に取り組まなければなりません。

そのため、教育学部では、教育と人間にかかわる多様な事象を対象とした諸科学を学ぶことで、心と人間と社会についての専門的な識見を養成し、さらに広い視野と異質なものへの理解、そして多面的で総合的な思考力と批判的な判断力を形成し、人間らしさを擁護し促進する態度を啓培することによって、新しい種類の〈教育〉を創造し、地球社会の調和ある共存に貢献できる人材の育成を目的としています。このような人材を育成するために、教育学部では、心と人間と社会について深い洞察力をもち、柔軟な思考と豊かな想像力に富む学生を求めています。

教育学部では、平成24年度までに既に3,000名を超える卒業生を送り出しており、卒業後の進路は、公立学校、福祉関係、官公庁をはじめ製造業・金融保険業・商社等の一般企業や、新聞社・出版社・放送界等ジャーナリズム関係など多岐にわたっています。また、約3分の1の学生は、より高度な専門知識を身につけるため大学院に進学しています。

(2) 教育学部の教育内容

教育学部は、戦後の学制改革に伴う新制大学の発足と同時に創設され、それ以来幾多の変遷を経て、平成10年度から教育科学科1学科に再編成されました。これは、教育の総合的理解が必要な学部段階では、教育に関する諸科学の修得に重点を置いた幅広い基礎教育を重視し、ゆるやかに専門的分化を図ることを目的としたものです。思想、歴史、制度、実践、発達、学習、心理、社会など多様な学問的観点から人間と教育についての総合的理解を得ることを重要視しています。

学生は、入学後の2年間は所属する「系」を特定せずに学習を進め、3回生進学時に「系」に分属します。1回生には、教育学部における研究の全体像を理解するための必修科目「教育研究入門Ⅰ・Ⅱ」、レポートや論文作成のために必要な技能を習得するための推奨科目「情報学Ⅰ・Ⅱ」が開講されています。2回生になると専門的分化の流れをよりクリアにするために、さまざまな専門分野の講義・演習を履修します。そして、2回生の後期には3回生以降の専門領域を決定するためのオリエンテーションが開かれます。3回生以降は「現代教育基礎学系」・「教育心理学系」・「相関教育システム論系」の3つの系に分属して各専門領域の学習を進め、4回生では卒業論文を作成するためのさまざまな指導が少人数で行われます。

「現代教育基礎学系」では、教育の原理や方法、人間観や発達プロセスについての研究が行われています。具体的には、哲学、歴史学、教育方法学、心理学などに基礎を置く専門分野から構成され、教育に関わる事象について、学校教育はもとより生涯発達、社会・文化など広い領域を視野に入れた研究・教育を行っています。「教育心理学系」では、人間の認知や深層心理の研究を行うために、教育心理学、認知心理学、臨床心理学を中心にしたカリキュラムが組まれ、心の仕組みとはたらきについての幅広い識見と柔軟な思考力の育成が行われています。「相関教育システム論系」では、社会や制度のなかでの教育を研究しています。教育と社会の結びつきを創造的に探究することを目的とし、これからの社会と人間に求められている重要な課題を意識したカリキュラムを提供しています。

このように、教育学部は、教育科学科1学科3系で構成されています。

◇法 学 部

(1) 法学部が望む学生像

21世紀に入り、世界も日本も大きな転換期を迎えており、それに伴い様々な問題が生じています。こうした状況に対応して、世界の中での国家や社会のあり方を考え、これからの豊かな人間社会を構築していくためには、人間・社会・歴史に対する深い洞察力を基礎として、法律と政治の仕組みに関する専門的な知識を備え、社会全体を視野に入れながらそれらを組み合わせる構想力を有し、国家・社会についての制度設計や組織運営に指導的にかかわっていくことのできる人材の育成が不可欠となります。また、地球規模での交流が活発となっている今日、文化の多様性を尊重し、グローバルな視点のもとで法と政治、経済、社会の問題を捉え、人々の協調する平和な社会の実現に貢献できる国際感覚あふれた教養人が求められています。

法学部は、こうした能力を備えた人材を育成するために、法学・政治学の基礎的・原理的知識を提供するとともに、国際感覚を養い、現代社会にふさわしい総合的な知見を修得させることを、教育目標としています。

このような目標のもと、法学部では、世界・国家・社会の様々な問題に対する強い関心を持ち、多方面にわたる基礎的な学力を備え、論理的思考力にすぐれた学生を求めています。

本学部の卒業生は、裁判官、弁護士、検事、研究者、国家・地方公務員、国際機関職員として、また、金融機関、商社、マスコミ関係など、多方面で活躍しています。平成16年度からは法科大学院（いわゆるロースクール）制度が発足し、法学部を卒業して法科大学院に入学し、法曹への道を歩む人も多く出ています。

(2) 法学部の教育内容

法学部の専門教育には、学科制やコース制を設けず、専門科目の履修についても必修科目を設けていないところに、特徴があります。これは、学生の自主性を尊重し、みずから問題を発見し、みずから学ぶ姿勢を重視しているからです。授業は、短期に集中した学習ができるよう、原則として半年で完結する前期・後期制のもとでおこなわれています。また、法学・政治学を体系的・段階的に学ぶための指針として、入門科目である1回生配当科目、2・3回生配当科目、2・3・4回生配当科目および3・4回生配当科目を示し、4年一貫の学年配当を実施しています。そのうえで、各学期において登録できる専門科目の単位数に上限を設けることで（いわゆるキャップ制）、学生に対して専門科目についての堅実な学習を促しています。

講義は、毎年必ず実施される基本的科目に加えて、年度ごとに種々の特別講義を開講し、社会の変動に伴って生じる新しい法現象・政治現象や企業活動において現に行われている法実務などに積極的に対応しています。また、個々の学生がそれぞれの関心に沿って隣接科学と連携した学習を深めることができるよう、法や政治とかかわりの深い経済学部等の科目は相当数を受講できるようにしているほか、その他の学部の科目も、必要な要件を充たせば卒業単位に算入することを認めています。

また、法学部では、外国語の専門書に親しむ機会を提供し、基礎的な読解能力を養うため、教養科目の英語において、2回生について法学政治学英語を必修科目とし、また専門科目においても、英語・フランス語・ドイツ語の外国文献研究（任意選択）を3回生以上に配当しています。

さらに、法学部では、少人数教育を重視する視点から、1回生に、教養科目として、文献の調査・購読、報告、討論などの基礎的手法を学ぶ「法学部基礎演習」、3・4回生に、専門科目として、学生が主体となって報告と討論を行う「演習」（ゼミナール）の各科目を設けています。「演習」は、法学・政治学の多様な領域を対象として数多く開講され、学生のほとんどが参加し、積極的な学習の場になっています。

◇経済学部

(1) 経済学部教育理念

経済学部は大正8（1919）年に創立されて以来、自学自習を旨とする伝統を形成し、多数の優秀な人材を社会に送り出してきました。その教育理念は、真理の探究を通じて、現在の社会が直面している様々な問題の解決を目指し、激動絶え間ない現代社会を平和で調和的な発展に導く人材を育成することです。そのために、専門的知識を得させることだけでなく、学生の自主的な学問への取り組みを尊重して、柔軟な思考力と豊かな人間性を涵養することを目指しています。経済学は効率と合理性の価値を教える学問ですが、しかしその価値は同時に人間的価値、地球社会の繁栄、人びとが協力し合う社会と両立しなければなりません。しかも、社会の諸問題は複雑高度化していますから、確かな専門的基礎知識の教育も重要です。

そのため、経済学部では系統的で多元的なカリキュラムを整備して教育にあたるとともに、演習を重視して個人指導および集団学習を行なっています。また、日本国内に限らない背景をもつ学生を多数受け入れ、国際的視野のもとで教育にあたっています。教育活動の全体を通じて、時代の進展に対応した専門基礎学力を備え、豊かな心情と人間愛、人権および公正の感覚を有する人材の養成に努めます。

(2) 経済学部が望む学生像

経済学部の教員たちは、経済学・経営学の教育は、すぐに役立つ知識を与えることではなく、学問的基礎のうえに柔軟な思考力と創造性を備えさせることだと考えています。そのため、大学において意欲をもって学び、社会に出てからの経済活動においても自分を成長させ続けようとする学生を望みます。経済学部は、これまで、産業・経営・学術・行政などの領域で活躍する人材を多数生み出しました。経済学部は、このような良き伝統を継承し、そこに自分なりの発展を付け加えようとする意欲する学生諸君が入学してくることを望んでいます。

なお、経済学部は、平成21年度入試から、高等学校の文系の教育課程に対応した一般学力検査による選抜（190名）だけでなく、理系の教育課程に対応した学力検査による選抜（25名）、論文を重視した選抜（25名）にも定員の一部を割いています。それは、数学などに現れる理科的な才能や読解力と結びついた論文作成に現れる文科的な才能が経済学にむすびつくことを期待しているからです。

(3) 経済学部の教育内容

経済学部は、経済と経営、経済学と経営学の相互依存関係を重視して、平成21年度から経済学科と経営学科の2学科を経済経営学科1学科に統合しました。学科による区別のない1学部1学科の体制のもとで、「理論・歴史コース」「政策コース」「マネジメントコース」「ファイナンス・会計コース」という4つのコースが示されていて、そのガイドにしたがって専門科目を履修することによって、コースそれぞれの特性に応じた専門化がはかれるようになっていきます。1学年は前期と後期の2セメスターにわかれ、1セメスターにわたり毎週1回の授業を履修して試験に合格すれば2単位が得られます。学部科目はすべて選択科目ですが、入門科目、専門基礎科目、専門科目Ⅰ、専門科目Ⅱと年次配当によって階層化されています。

理系入試と論文入試の変更などの入試改革がおこなわれた平成21年度からは、入学したばかりの学生が、経済学部生としての基礎知識を身につけ、自立した学習力をつけさせるための「入門演習」を開設しました。新入生は最初の学年から、全学共通科目によって語学学習や教養学習をおこなうだけでなく、「入門演習」と9つの入門科目（ミクロ経済学入門、マクロ経済学入門、社会経済学入門、基礎統計学、経済史・思想史入門、現代経済事情、経営学入門、会計学入門、情報処理入門）によって、経済学・経営学の専門学習のための準備をすることになります。2回生になると「専門科目Ⅰ」の授業群、3回生になると「専門科目Ⅱ」の授業群が取れるようになります。

3回生以上になると、経済学・経営学の専門科目だけでなく、法学部が提供する法学や政治学の科目もとれるようになります。また、高度な学習を求める学生には、大学院と橋渡しする大学院共通科目も履修できます。

経済学部では伝統的に演習（ゼミナール）制度を重視し、少人数の学生と担当教員による対話を基本にした学習システムが存在します。2年次以降の演習（ゼミナール）は専門演習で、各教員が特定テーマを掲げ毎年各学年10名以内のゼミ生を募集して指導します。ゼミナール参加者は4回生の終わりに卒業論文を提出することができます。ゼミナールは、学生が教員から指導を受けるだけでなく、ゼミ仲間の学生同士の切磋琢磨、上回生や大学院生によるガイドによって、学問的・人間的に成長できる場であり、卒業後にもゼミ単位のネットワークが維持されるのが通例です。

◇理 学 部

理学部の教育理念

教育目標

- ・自然科学の基礎体系を深く習得し、それを創造的に展開する能力の養成
- ・個々の知識を総合化し、新たな知的価値を創出する能力の養成

教育の特徴

- ・自由な雰囲気の下で学問的創造を何よりも大切にし、自律的学修が推奨される学風
- ・理学科のみの1学科制
- ・緩やかな専門化を経て、研究の最前線へ

望む学生像

- ・自由を尊重し、既成の権威や概念を無批判に受け入れない人
- ・自ら考え、新しい知を吸収し創造する姿勢を持つ人
- ・優れた科学的素養、論理的合理的思考力と語学能力を擁し、粘り強く問題解決を試みる人

理学は、自然現象を支配する原理や法則を探求する学問であります。その活動の長い歴史を通じて、人類の知的資産としての文化のより深い発展に大きな役割を果たしてきました。また、理学は人類全体の生活の向上と福祉に貢献することを目的としております。

京都大学理学部は、自由な雰囲気の下で学問的創造を何よりも大切にしてきました。この気風が、新しい学問分野の創造に重要な役割を果たしてきました。その一端は、卒業生の中から3名のノーベル賞受賞者と2名のフィールズ賞受賞者を出したことからも窺えます。この学風を継承しつつ、京都大学理学部は広く開かれた教育・研究機関として発展しています。

京都大学理学部は、上に掲げた教育理念を実現するために、理学科のみの1学科制をとっています。それは、学生諸君が自分に最も適切な専門分野を、自分自身の学修を通して見い出せるよう、専門化を緩やかに進めることが出来るためです。このために、学問分野の有機的な関連が分かるよう分野横断的講義が用意されています。その一方で自律的学修の姿勢を養うため、少人数対話型教育が充実されていると共に、学生による自主ゼミ等の勉学活動を積極的に支援する体制が整えられています。そして、相応しい分野を見出した人が、フィールド実習や実験教育により、学問に対する情熱を沸き立たせられるようカリキュラムが工夫されております。このようにして、学生諸君が自ら体系的な基礎学力と技術を習得しつつ、学年の進行とともにその専門化の程度を進め、最終的にはその研究分野の最前線に接することを目指します。

このように組まれたカリキュラムによる修学により、自己の世界を広げ、自己の相対化ができ、自然に対して謙虚な探求的態度を常に維持できる存在となる基盤を獲得させます。卒業後は、その基盤に立って、研究者として、あるいは責任ある職業人として活躍し、新たな知的価値を創出することを目指しております。

理学部の概要

明治30年に京都帝国大学理工科大学の中核として創設されて以来、現在まで一貫して、出来るだけ視野の広い教育を授け、自由にして獨創性に富む気風を育てることを理想としています。

本学部は全体で理学科1学科の構成で、多岐にわたる研究教育が行われています。志願者が、将来専攻する分野を出願時に決定することは難しいと思われますので、入学後、各人が学びながら最適な道を探して、専門化を徐々に進めていくことを期待しています。理学部の科目は一般教育科目、専門基礎科目、専門科目の三つに分類されています。4年間の学修期間のうち1・2年次で主として一般教育科目と専門基礎科目を広く履修します。専門基礎科目の中には、理学部における専門分野及び関連する学際的領域の研究の最先端や将来の展望について分かりやすく解説するオムニバス形式の講義も用意されています。

3・4年次においては主として専門科目を履修します。2年次の終わりに数理科学系、物理科学系、地球惑星科学系、化学系、生物科学系の五つの系のいずれかひとつに登録して専門化を進めます。ひとつの専門分野とその関連分野を重点的に学習し、最終的にはその研究の一端に触れることができることを目指しています。

4年次の学修科目の卒業研究は系毎に、数学講究（数学）、物理科学課題研究（物理学、宇宙物理学）、地球惑星科学課題研究（地球物理学、地質学・鉱物学）、化学課題研究（化学）と生物科学課題研究（動物学、植物学、生物物理学）があります。これらは特定のテーマを通じて各専門分野の研究に触れる極めて重要な科目であり、少なくとも一つのテーマを選択して履修しなければなりません。

研究者的な資質を育む教育理念に明らかなように、卒業後大学院に進学する者が全体の5分の4以上に達し、博士の学位取得者は毎年100人を超えます。大学卒業後、民間企業等に就職し専門的・技術的職業に従事する者は全体の10分の1程度です。

◎各系の概要

数理科学系

理学部における数学の教育課程は、理学部学生全体を対象にするもの、数学を必要とする専門分野へ進むとする学生を対象とするもの、数学を中心として学ぶ数理科学系の学生を対象とするものの3つに大別されます。

1年次には、全学共通科目として「微分積分学A, B」, 「線形代数学A, B」, 理学部科目として「線型代数学演習A, B」があります。このうち「線型代数学演習A, B」は理学部だけにある科目で、理学部の教室で開講されています。これらは、理学部の全学生向けのものであり、高校までの数学を深めて理論的な基礎を固めると同時に、幅広く発展させるものです。

2年次には、「微分積分学統論Ⅰ, Ⅱ」, 「線形代数学統論」, 「集合と位相」, 「函数論」, 「代数学入門」, 「幾何学入門」, およびこれらの演習科目である「数学基礎演習Ⅰ, Ⅱ」があります。このうち「微分積分学統論Ⅰ, Ⅱ」や「函数論」は、数理科学系だけでなく、物理科学系など、将来専門に進んでも数学を必要とする学生にも強く推奨される科目です。

3年次では数理科学系の学生を主な対象として、「代数学Ⅰ, Ⅱ」, 「幾何学Ⅰ, Ⅱ」, 「解析学Ⅰ, Ⅱ」などのコアコースと呼ばれる科目を中心に、各分野で専門的な講義と演習が用意されています。また計算機科学の基礎や、確率統計の重要な応用である保険数学の講義も開かれています。3年次までのカリキュラムを終えれば、知識としての数学の基礎付けができ、幅広い分野の概観が得られるものと考えられます。

4年次では卒業研究科目である「数学講究」を中心として学習することになります。各講究は5名までの少人数で主としてセミナー形式で行われ、数理科学系の学生はどれかの数学講究に所属して、教員の個人指導によって、数学のより専門的なテーマを深く学ぶことになります。

数理科学系の卒業生の大部分は大学院に進学します。特に進んだ学生の中には、3年次修了段階で大学院へ進学するものもあります。

物理科学系

物理科学系は、物理学と宇宙物理学の専門分野に大きく二つに分かれます。そして物理学の専門分野は物性物理の分野と原子核・素粒子・宇宙の物理の分野とに更に分けられます。

金属、半導体、磁性体、超伝導体等の固体をはじめ、液体、流体、プラズマ、ソフトマター、生体にいたる物質の多彩な姿は原子分子の集合体が示す種々な相です。様々な条件の下でそれらを制御し、それらの性質の解明をめざす物性物理の分野は、現代文明を支える最も基礎的な学問分野の一つといえます。そこではミクロの世界を探索するための高度な実験手段や種々の数理的方法の適用開発を通して物質の新しい様相が次々に明らかにされつつあります。また、レーザー等により高精度に制御された原子や極低温下における原子は量子力学が支配する世界であり、そこで織り成す種々な現象は現代物理学の宝庫です。更に、非平衡条件下における自己組織化現象の解明等は生命科学ともつながる学際的分野を構成しています。

原子核・素粒子・宇宙の物理の分野では、原子よりも小さい極微の物質世界についての種々な現象や法則を研究するとともに、そのような極微の世界についての知識に基づいて、宇宙という極大の世界の構造や現象を研究しています。理論的な研究とともに、原子核・素粒子の極微世界の研究では加速器等を用いて、また宇宙の物理の研究では宇宙放射線の観測を行うなどの実験的研究が行われます。実験的研究の多くは巨大科学となっていますが、学部教育ではその基本を理解し基礎技術を身につけます。

宇宙物理学の分野では、太陽、恒星、惑星系、星間空間、銀河系、銀河から宇宙の大規模構造にわたるまで、様々な階層の天体の観測とそれに関する理論の研究を行っています。宇宙物理学の分野の特徴である個々の天体現象の解明とともに、宇宙を支配する法則や宇宙論の研究も行われています。

3年次に入ると、講義等の他に、課題演習、4年次では課題研究（卒業研究）があります。これは上記の分野から代表的なテーマを選んで、教員・学生がいくつかの小グループを作り、セミナー・観測・計算等を織りまぜて実習形式の教育を行うものです。課題演習では研究の先端を意識した基礎的テーマの学習を、課題研究では学生個人が研究そのものに部分的に触れることを目指しています。

地球惑星科学系

この学系には、地球物理学分野と地質学鉱物学分野があります。地球物理学分野では、固体地球物理学として、地球の形状・重力の測定および地殻の変動などを調べる測地学、第四紀の地殻運動などを明らかにする活構造学、地震波の観測や解析、地震の発生機構や地球の内部構造を調べる地震学があります。水圏地球物理学として、陸水と海洋の運動・それらの関連などを解明する、陸水学や海洋物理学があり、大気圏物理学としては、大気の大循環を把握し、その力学を解き明かす気象学、長期間の気候変動や気候システムを解明する物理気候学があります。また、地球・惑星の電磁氣的性質、超高層大気・磁気圏・惑星間空間の構造と変動を調べる地球電磁気学・太陽惑星系物理学があります。地質学鉱物学分野では、1) 地球・惑星を構成する物質の物質科学的研究、2) 地殻のテクトニクスと地球のより深部での過程との関連、3) 地球表層部での生物圏とそれを取りまく水圏・気圏・宇宙環境の相互作用の歴史などを主なテーマとした教育と研究を行っています。

両分野とも2年次後期から徐々に専門化するような幅広いカリキュラムが組まれており、授業以外にも野外での調査実習や、各種の実験機器を用いた室内実験や計算機を用いた数値実験を経験しながら、やがて4年次では具体的なテーマについて卒業研究が行えるようになっていきます。このような教育や研究を通じて、地球や地球外の惑星などの生成・進化の過程を生き生きと感ずることのできる人材の育成を目指しています。

化学系

現在、化学は、「物質の状態、性質及びその変化」の研究という共通点で結ばれた、多様性に富む物質科学の一分野を形成しています。いいかえると、化学は、原子、分子、生命から宇宙に至る、この自然界に存在するあらゆる物質をその研究対象とする学問分野です。そのため、化学系を専攻することは、物理科学系、地球惑星科学系、生物科学系と複合する領域を含む、広範囲にわたる学問分野を専攻することを意味します。このことを踏まえて、この系では広い視野をもって、物質科学の基礎となる知識を身につけさせることを、最優先の目標として学部教育を行っています。したがって、化学系を専攻する上で、他の系と異なる大きな特徴は、理論から実験のコースまでを含む物質科学の幅広い学習により、将来、どのような関連分野の研究を行う際にも望ましい、バランスのとれた基礎学力を身につけることができる点にあります。

具体的には、まず3年次で主として基礎的な科目群を履修します。この科目群は物質科学における基本的知識の修得と、実践を通じてのその本質の理解という2点を考慮し、量子化学、物理化学、無機化学、分析化学、有機化学、生物化学の各科目と、それらの演習、実験のコースから構成されています。また基礎的な科目群とは別に、理論・物理化学、無機・物性化学、有機化学、生化学・分子生物学などのさまざまな分野にわたる、アドバンストコースとしての専門科目群が用意されています。3年次から4年次にかけて、各人の研究分野への興味に応じ、これらの専門科目を複数選択、履修し、基礎科目群の履修と並行してゆるやかに専門化を進めます。さらに、4年次では理論系や実験系の研究室の一つに所属し、スタッフの直接の指導のもと、実験などを通じて物質科学における思考や研究の方法を学び、先端の研究に触れられるよう配慮されています。

生物科学系

生物科学は、生命現象を様々な角度から研究し、理解しようとする学問体系です。生物科学系には動物学、植物学、生物物理学の3つの専門分野があり、そうした広範な学問体系を理解しやすいように教育的配慮がなされています。

動物学では、動物系統学、動物行動学、動物生態学、動物発生学、環境応答遺伝子学の他に、人類の起源と進化と多様性に関する人類学の講義が行われています。植物学では、植物系統分類学、植物生理学、植物分子生物学、植物分子遺伝学などの講義が行われています。また、講義内容の理解を助けるために講義に沿った実習があります。さらに、臨海実習・野外実習などがあり、フィールドに出て実際の生物に触れながら学べるように配慮されています。生物物理学は、核酸やタンパク質や脂質などの分子の構造と機能及び細胞の構造と機能をもとに生命現象を理解しようとするもので、そのために分子生物学、分子遺伝学、構造生物学、細胞生物学、分子情報学などの講義があります。また、脳・神経系のはたらきを分子・細胞レベルで理解するための講義もあります。

このように専門課程では、さまざまな分野をカバーするように講義や実習が用意されているので、各人の興味に応じていろいろな分野の講義を受けることができます。また、4年次のために各人の興味に応じて23の研究グループの中から一つを選ぶ生物科学課題研究があり、各学生が研究室に配属されます。教員や大学院生の直接の指導のもとに、生物科学の実験を通して研究を体験しながら生物科学の理解を一層深めること

ができます。

生物科学系では、各人の興味に応じた適度な専門化と、また同時に専門分野にとらわれない、幅広い知識と能力を持った人材の育成を目標にした教育を行っています。